

は し が き

博士の学位を授与したので、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定に基づき、その論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨をここに公表する。

氏名	三成 清香
生年月日	昭和59年8月24日
本籍	日本
学位の種類	博士（国際学）
学位記番号	博第17号
学位記授与年月日	平成28年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
研究科・専攻の名称	宇都宮大学大学院国際学研究科（博士後期課程）国際学研究専攻
学位論文題目	海を渡った物語—ラフカディオ・ハーンと再話、そして女性—
論文審査委員	
	主査 教授 丁 貴 連
	教授 柄木田 康 之
	教授 重 田 康 博
	教授 渡 邊 直 樹
	教授 米 山 正 文
	教授 日 比 嘉 高

博士論文の内容の要旨

専攻名 国際学研究専攻

氏名 三成 清香

1. 論文題目

海を渡った物語—ラフカディオ・ハーンと再話、そして女性—

2. 研究の背景

本研究は、ラフカディオ・ハーンという人物と彼の再話活動について迫ったものであ

る。再話作品の中で女性を主人公とした物語が多くを占めていることは、ハーンにとって「女性」が一つの大きな関心であり続けたことを示している。

19 世紀を生きたハーンに注目する際に欠かすことのできない視点であるにも関わらず、これまでほとんど触れられてこなかったのは、ハーンと西洋諸国の社会的状況との関係である。とりわけ 1870 年代頃から興ったジャポニスムは、西洋に「日本女性」のイメージを強く与え続けた。1863 年から 1890 年までの間、イギリスとアメリカに過ごしたハーンもまた、ジャポニスムが与えた日本像から自由ではあり得なかった。

3. 研究の目的

そこで本論文では、ハーンとその再話を闇雲に賛美することから距離を置き、19 世紀という時代の中でハーンがいかにかそれまでとは異なった作品を西洋へ発信しようとしたか、その意図を明らかにすることを目的とした。19 世紀に西洋の読者に向けて書かれた再話作品とその原話を比較していき、「描き直し」の過程で強められた典型的日本女性のイメージの意義を浮き彫りにした。

4. 研究の内容

本論文は序章「ラフカディオ・ハーンと女性、そして日本」、第Ⅰ部「ジャポニスム文学への挑戦」、第Ⅱ部「新しい女性像の発信」、そして終章「西洋へ示された日本女性」という構成を取っている。具体的な内容は以下の通りである。

序章ではハーンの著作の中から女性が物語の中核をなす再話作品を取り上げる意義、ハーンとジャポニスムとの関係、そして彼の生い立ちについて主に女性に注目し、先行研究を踏まえながら論じた。

第Ⅰ部では、新聞記事を原話とした作品「勇子」、「赤い婚礼」、「君子」の三作品を分析した。いずれもサムライの娘が主人公で、エキゾチックな存在としての日本女性が強調された。ここからは、低い日本語能力ゆえ、現実社会を捉え切れなかったハーンの姿、或いはそれまでのジャポニスム小説の流れを受け、存在しない日本の姿を彼の中で描き出すことに留まってしまっている、いわばジャポニスムが与えた一つの限界が浮き彫りになった。

そして、第Ⅱ部で扱ったのは、ハーンが心酔の松江時代、絶望の熊本時代、神戸時代における西洋社会での生活を経て、晩年の東京時代に入ってから出版された七作品である。「蠅のはなし」の〈玉〉、「雉子のはなし」の〈妻〉は、孝道を何よりも重視し、その思いを命がけて果たそうとした。また「葬られたる秘密」は、節操のない〈妻〉を主人公とした訓戒の物語であった原話を、貞淑かつ母性愛に満ちた〈お園〉の物語として描きなおされたもので、ストーリー自体の意義が大きく変更された。サスペンス的な要素の強い「お貞のはなし」でも〈お貞〉は、実際には霊的な能力で思うままに後妻や子どもたちを皆殺しにする恐ろしい女性であるが、表面上はあたかも極めて一途な女性で

あるかのように描かれた。こうした「孝」や「貞」に生きた江戸時代の庶民レベルの女性たちは、家父長制という枠の中で、男性中心社会に慢心する男性たちを啓蒙していると言える。

さらに、ハーンが女性の嫉妬や復讐を描くようになったことも注目し値する。それは単なる自己犠牲的女性ではなく、心の葛藤、抜け出すことのできない苦しみといった人間的感情を女性に与え、男たちに復讐することで欲望を満たさせているからである。これについて、「和解」という物語は、これまで<夫>の裏切りを<先妻>が許す和解の物語と解釈されてきたが、本論文では、嫉妬による復讐の物語として読み解いた。この他、武士階級の人々の嫉妬をテーマとした「破られた約束」、「因果話」について考えてみても、死後の世界で自らの欲望や願いを果たそうとする女性たちが描かれている。そこには、男性中心の家父長社会に生きる女性たちを、死後の世界で復讐させることで、解放しようとしたハーンの姿が見て取れる。すなわち、晩年に描かれた多様な女性像は、ハーンがエキゾチシズムやジャポニスムにより構築された日本のイメージから脱却したことを示すものなのである。

終章では、近代化に邁進する日本で晩年を迎えたハーンが最終的に、近世の物語に依って再話活動を続けた意義、そしてそれらが現代にまでつながる日本女性のイメージに大きな影響を与えていることについて言及した。

本論文では、これまで多く注目されてこなかった 10 作品を取り上げ、分析を行ってきた。これまでは、ハーンの再話作品の中に失われゆく旧日本の良さを見出そうとし、「女性もの」の女性たちを画一化された日本女性像の中に閉じ込めてしまうような読み方に偏っていたが、ハーンが 19 世紀を生きた人物であることに留意することにより、描かれた女性たちがいかに自由な、解放された生を生きる者であったかを浮き彫りにすることができた。それは、いうまでもなく、それまでのジャポニスムやジャポニスム文学が作り上げた固定的な日本女性像を覆すための新たな女性像の発信であり、ジャポニスムへの挑戦であったということが出来る。

5. 研究の意義

ハーンについて考えるとき、彼が日本という一つの幻想に沸いた 19 世紀の西洋社会に生き、ジャポニスムの中で無視できない「日本女性」という存在に強く影響を受けながらも、それらに異を唱える形で「女性もの」を描くに至ったという事実を蔑ろにすることはできない。本論文では、ハーン的女性描写が、西洋社会に蔓延する固定的なイメージを覆そうとする挑戦であったことを明らかにした。

博士論文審査結果の要旨

専攻名 国際学研究専攻

氏名 三成 清香

1. 審査概要

(1) 予備論文

2015年9月11日、三成清香氏の学位請求予備論文「海を渡った物語—ラフカディオ・ハーンと再話、そして女性」が提出され、国際学研究科所属教員5名による予備論文審査委員会がその審査に当たった。同委員会はず、 「宇都宮大学大学院国際学研究科における博士の学位授与に関する取り扱い要項」第5条で規定された書類が提出されていることを確認し、次に提出された論文を1ヶ月に渡って精査した。その結果、同年10月20日に開催された審査委員会において同論文が学位請求論文に値すると、全員一致で判断した。ただし、以下の4点については改善・補強を要求することとなった。

- ①ハーンの世界の特異性を示す「基準」となる「ジャポニスム」については、特定の先行研究に依存することなく、前提として論じておく必要がある。
- ②論文内に重複部分がある。削除するか表現を変えるべきである。また分析に関する引用が長すぎる、引用されている図表についての説明がないこと等形式的な部分に修正が必要である。
- ③ハーンの限界に関して、江戸時代の多様性について前提として論じた上で作品分析・比較を行う必要がある。
- ④タイトルが「海を渡った物語」となっていることから、海を渡った後の西洋社会におけるインパクトについて調査し述べる必要がある。

(2) 学位論文

2015年12月14日、三成清香氏の学位請求論文が提出されたのを受けて、予備論文審査委員5名に新たに外部委員1名が加わった計6名による学位請求論文審査委員会が発足され、その審査にあたった。2016年1月27日に実施された審査委員会では、まず 「宇都宮大学大学院国際学研究科における博士の学位授与に関する取り扱い要項」第10条で規定された書類が提出されていることを確認し、次に予備論文審査で指摘された事項が改善されているかを検証した。その結果、いずれの点においても指摘された事項が格段に改善・補強されていることを確認し、全員一致で最終試験を実施することを承認した。

(3) 最終試験

最終試験では、本論文について三成清香氏に概要説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。その際に、以下のような内容が審査委員会で議論された。

まず総評としては、これまでハーンの日本理解の産物と捉えられがちであった再話作品を「ジャポニスム」の枠組みの中で捉えなおすことによって、ハーンの再話活動が19世紀の西洋社会に広がりつつあった日本イメージ、とりわけステレオタイプの日本女性像を覆そうとする挑戦であったという新しい視点を提示したことが評価された。

次に個々の論文に関しては、序章と第2章、第7章、第8章が高く評価された。特に序章は、本研究の裏付けとなる先行研究と参考文献への綿密な調査と読解が行なわれている。二次資料については日本語で読めるものはほとんど網羅され、しかも、単なる資料の羅列にとどまらず、それらを新たな視点に関連づけながら論じられている。この部分は、論文自体が現在のハーン研究の水準に追いつくという意味でも十分かつ重要なところである。また第2章や第7章、第8章については、従来の視点とは異なった立場で作品分析を行っていることがとりわけよく分かる部分であり、新たな視点が明確化されていると評価された。

そして、この論文は、「ラフカディオ・ハーンの日本理解」にとどまらず、それを英語圏へ向けて発信した意義にまで注目の範囲を広げていること、すなわち欧米の読者たちの理解の枠組みを一方に置いていることが研究全体の枠組みを広げている。特に第Ⅱ部の第7章以降は「嫉妬」をテーマとした作品の分析が行われていて、ハーンが日本女性に復讐させることで、男性中心の社会に生きた女性たちの内なる欲望や願いをありのままに描き出していると指摘している。こうした東アジアのジェンダー的な規範の問題とキリスト教圏の規範の問題をハーンがいかにぶつけようとしたのかという、非常に大きい研究の構想につながる研究である。

ただし、「海を渡った」ハーンの再話作品に対する欧米の読者の反応に関しては二次資料に頼りすぎている点、第6章は先行研究を踏襲しすぎており、独自の視点が打ち出されていない点などが指摘された。また、本論文のキーワードとなっているハーンの「理想的な女性像」の論点に揺れが見られるなど論述が尽くされていない憾みが残る。しかし、これらは本論文の学術的価値を損なうものではないことも、審査委員の間で確認された。

以上の判断により、本審査委員会は三成清香氏の学位請求論文が博士（国際学）の学位を授与するにふさわしいものであると、全員一致で合意した。

2. 審査結果

合